

時事新報編輯に關する書信にして往々社員へ宛御送致...

時事新報定價 時事新報一年三百六十五日一日モ休刊セメ其代價...

Table with 2 columns: 五號活字ニテ, 一行廿四行. Lists various rates for different types of printing.

時事新報

今の米國は尙未だ近からず日本より米國に入る貨物は多くして米國より日本に入るもの却て寡き其原因は既に前號の紙上にも記したる如く米國貨物の價値兩つながら歐洲のものに及ばずして斯る不均等と來したるに非ずとすれば他も其理由なる可からず即ち我輩の見る所を以て之を以て今今の米國の繁昌は太平洋に面したる東海岸の諸州を以て最も爲し其商工業の盛ると歐洲諸國を壓するの勢にして...

れ販路甚だ弘まらざる者なきに非ず例へば日本米の輸出は年々に盛にして今後西洋の市場に其需要多かる可きは世人の許す所あれども米國に於ける販路のみ何は狹隘なる證據に於て昨年中の米の輸出總額二百二十五萬餘圓に達したる中に米國の市場に入りたる者は僅に九萬餘圓あり而して其米國に入る所の日本米は紐育を始め東海岸の諸州府に於て重に消費する由なれども日本より輸出の順序は中間に歐洲の市場を通過するが或は然らざるも尙や迂迴して太平洋より米國に入る者なれば其價値不廉なるを免れず既に本年の始めに當り米國に米の直輸出と爲さんと欲し一般の帆船を備ひ美濃米伊勢米數萬石を積載せ我四日市港より發艦しよとせども其航路は直に太平洋より桑港を指して非ずして故に印度海より迂迴の路を取り太平洋に出で紐育に送るの計畫なりし由なり要するに地理上の遠近と商賣上の遠近とは同一にして同一ならず米國の大陸を横貫して東海岸の諸州に達する路程は印度洋より太平洋より出る距離に較べて地理上の遠近にみよ著しき相違あれども今日、日米兩國間の貿易貨物が地理上に於て最も近き中央聯合太平洋鐵道に依らずして故に迂迴の海路を取り更に幾多の日子と費して尙はスエズ運河に出る所以は獨り運賃の廉價なるが爲めならんのみ今此趣を反對にし日本より米を送るの其代りに米國より或る種の物品を取寄る場合にても太平洋三千海里の運賃は歐洲製の貨物に對し不廉からざるを得ざるの理前も述べたる如くなれば米國が其貨物を東洋に賣込むの途上に商賣上に距離の遠隔ある一大障礙に遇られて今の出入不均等を來したるに非ざるなきやと我輩の疑に疑と存する所なり或人の説も米國の建國以來星霜も尙は短く商工業も草創にして未だ幼稚を脱せざれば斯る國の製造貨物を日本の如き舊國に輸入するは不策と稱し可し之を以て歐洲諸國は殖産興業の日既に久しく器械製作も幾多の經驗もあれば日本が外國の貨物と需要するの場合も於ては之を歐洲の市場に求むると安全ある可しと云ふ者あれども我輩の見る所を以てすれば米國の商工業を幼稚なりと云ふは世人の私評たるに過ぎず今日の實際に於て歐米を比較し其製造技術に優劣なきは争ふ可からざる所なれども米國の製造品は唯商賣上の距離に妨げられて其運賃自由ならざるのみ請ふ一步と進めて其次第を次號に論せん

官報

海軍省訓令第三十四號 北海連屬 府縣 明治十九年(一月)乙第一號 西洋形船舶航海及碇泊記事差出方ノ件ヲ廢ス
明治廿一年六月十五日 海軍大臣伯爵西鄉從道
明治十九年二月四日 逕宮内省官制中侍從長ハ親任トス
明治廿一年六月十五日 宮内大臣子爵土方久元
大勳位以下宮中儀式上席次ヲ定ムル左ノ如シ
明治廿一年六月十五日 宮内大臣子爵土方久元
一 大勳位
二 親任官
三 內閣總理大臣
四 樞密院院長
五 海軍大臣
六 陸軍大臣

侍從長 元老院議長 樞密院副議長 樞密顧問官 監軍
三 公署
四 勳一等 旭日桐花章 旭日章 瑞寶章
五 勳任一等 勳任二等
六 勳任二等
七 勳任二等
八 勳任二等
九 勳任二等
十 勳任二等
十一 勳任二等
十二 勳任二等
十三 勳任二等
十四 勳任二等
十五 勳任二等
十六 勳任二等
十七 勳任二等
十八 勳任二等
十九 勳任二等
二十 勳任二等
二十一 勳任二等
二十二 勳任二等
二十三 勳任二等
二十四 勳任二等
二十五 勳任二等
二十六 勳任二等
二十七 勳任二等
二十八 勳任二等
二十九 勳任二等
三十 勳任二等
三十一 勳任二等
三十二 勳任二等
三十三 勳任二等
三十四 勳任二等
三十五 勳任二等
三十六 勳任二等
三十七 勳任二等
三十八 勳任二等
三十九 勳任二等
四十 勳任二等
四十一 勳任二等
四十二 勳任二等
四十三 勳任二等
四十四 勳任二等
四十五 勳任二等
四十六 勳任二等
四十七 勳任二等
四十八 勳任二等
四十九 勳任二等
五十 勳任二等
五十一 勳任二等
五十二 勳任二等
五十三 勳任二等
五十四 勳任二等
五十五 勳任二等
五十六 勳任二等
五十七 勳任二等
五十八 勳任二等
五十九 勳任二等
六十 勳任二等
六十一 勳任二等
六十二 勳任二等
六十三 勳任二等
六十四 勳任二等
六十五 勳任二等
六十六 勳任二等
六十七 勳任二等
六十八 勳任二等
六十九 勳任二等
七十 勳任二等
七十一 勳任二等
七十二 勳任二等
七十三 勳任二等
七十四 勳任二等
七十五 勳任二等
七十六 勳任二等
七十七 勳任二等
七十八 勳任二等
七十九 勳任二等
八十 勳任二等
八十一 勳任二等
八十二 勳任二等
八十三 勳任二等
八十四 勳任二等
八十五 勳任二等
八十六 勳任二等
八十七 勳任二等
八十八 勳任二等
八十九 勳任二等
九十 勳任二等
九十一 勳任二等
九十二 勳任二等
九十三 勳任二等
九十四 勳任二等
九十五 勳任二等
九十六 勳任二等
九十七 勳任二等
九十八 勳任二等
九十九 勳任二等
一百 勳任二等

Table with 4 columns: 種目, 五月, 前年五月, 増減. Lists various statistics and news items.

下等支那人の米飯 支那人の出稼きも勇める遠く千里の外より赴き足跡の到るところ遂に力役社會の猜忌を買ふて排斥せらるるまでに至りまは常に讀者の知る所にして支那人はまた其國內地にも遠近に廻りて貨物の道を賃取り居れるよし日本郵船會社の船が月に再度支那に渡り芝罘、天津に立寄るも毎船少なくも五百餘名位の下等支那人を搭載するはにして招商局の船も乘りて此間に往復するも亦少からざる可し其下等支那人は大工左官或は土方人足などの種類にして資本家に雇はれて山東地方より天津最寄へ出稼するものなれば船費は我儘より出すべしに非ず由て船費の高きと廉きとは固より論なく只管取扱ひは厚き方へ走る中にも米飯の多少と精粗とは最も此等下等人民の嚮背を決するに力あるものと然るに招商局の船に於ては彼のメシヤ、シタ、南京米を炊きて客人に供し分量さへ定めを定めさせぬ規則を守り時として前夜の餘りを以て粥を炊くのみならず晝夕とも冷飯を炊くものなれば流石の下等支那人も大開口ある其仔細は支那人の口實を聞きしに日本郵船會社にて其米を賣りて其米を賣りしに日本にて安し上等の米と異ひ支那行のとき山支度して膏梁の類なりたる